



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2008年3月発行(3ヵ月1回発行)

第36号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

ニュージーランドへ寄贈の絵画特集

(社) 海外と文化を交流する会では 1981 年に、ニュージーランドへ絵画を寄贈いたしました。14 人の日本画家による 16 点の絵画です。オーストラリアへの日本画 25 点寄贈に続いての事業でした。この 16 点をご紹介します。



片岡珠子「赤富士」

片岡珠子さんはつい先日、2008年1月16日に103歳で亡くなった。片岡画伯は1905年に北海道札幌で生まれ、1926年に女子美術専門学校(現女子美大)を卒業。1930年に院展で初入選。芸術院会員。1989年には文化勲章を受章している。大胆な構図、力強い筆致、鮮烈な色彩で多くの人を魅了する。「面構」や「めでたき富士」などのシリーズがある。

郷倉和子「桔梗」

1914年東京出身。日本芸術院会員。文化功勞者。



濱田台児「鈴蘭」

1916年鳥取出身。日本芸術院会員。日展で活躍。



濱田 観「花芥子」 1889～1985年。兵庫出身。日本芸術院会員。花鳥画で活躍。



池田遙邨「三保の松原」 1895～1988年。岡山出身。日本芸術院会員。文化勲章受章。



河野秋邨「松風」 1890～1987年。愛媛出身。日本南画院結成。花鳥画で活躍。



河野秋邨「天竜」



河野秋邨「黎峰老松」



村松乙彦「桜花ルリ鳥」

1912～1983年。愛知出身。日展で活躍。



中村貞以「春宵」

1900～1982年。大阪出身。日本美術院で活躍。清涼な美人画が特長。



小栗 潮「菊」

1921年佐賀出身。東京美術学校卒。日展で活躍。



岡 信孝「紅白梅」

1932年、神奈川出身。祖父は川端龍子。古都風景や花鳥画で活躍。



塩出英雄「晩春」

1912年、福山出身。紺綬褒章受章。院展で活躍。



佐藤園夫「暁」

1922～2006年。岩手出身。日本芸術院会員。日展で活躍。



鈴木竹柏「新春の富士」

1918年、神奈川出身。日本芸術院会員。日展で活躍。



吉岡堅二「雉子」 1906～1990年。東京出身。創造美術（現・創画会）結成。帝展で活躍。



「篤姫」によせて

角谷多美子（社）海外と文化を交流する会理事

今、NHKの大河ドラマがずいぶん評判になっておりますようで、そのことについて何か書くようにと専務理事からお勧めをいただきました。と申しますのは、私の母が「篤姫」の遠縁にあたるからです。

ドラマの中に、篤姫が養女になって本家に入って間もなく「今和泉風は早くお忘れなさい。」という母上からの手紙を受け取る場面がありました。もう本家の姫になったのだから、実家である今和泉島津家の習慣を早くわすれなさいというわけです。これを見て私には大いに思うことがありました。江戸時代の武家の娘はだれもが他家に入ったら実家の習慣を捨ててその家の者になり切るようしつけられていたのでしょうか。ドラマではずいぶん誇張して表現されていたと思いますが、そんなことは篤姫も十分わかっていらっやした。でもそれを実行するのは、いかに賢い篤姫でもやはり並大抵のことではなかったということを経験したのだからでしょう。私の母は明治30年の生まれでしたが、やはり武家の娘としてしっかりしつけられた人だったと思います。その上、大変無口な人でしたから、実家のことはあまり話そうとはいたしませんでした。ですから、あまりお伝えできることはないのですが、私が母を通して感じ取ったこと、母の思い出など少し書かせていただくことにいたしました。

父との婚約が決まりました時、母は祖母に連れられて妹たちと一緒に婚家にあいさつに参りました。祖母を先頭に母と妹たちがきちんと一列に並んで静々と廊下を歩いて行った姿が

とても印象的だったと、商家に生まれ育った父方の伯母に聞いたことがあります。母にとって、この両家の習慣の違いは大きな悩みであったと察せられます。

婚家の者になり切ろうとしていた母の唯一の抵抗は食物でした。さつま汁、お雑煮（干した大正エビや干し柿が入っています）、しゅんかん、など鹿児島県の郷土料理をよく作ってくれましたし、さつま揚げ、せんじ（かつおのエキス）、かるかん、灰汁巻きなど鹿児島県の物産展があると必ず行って買って参りました。材料を取り寄せてまで作ってくれたものもありました。どれも私どもも大好きでした。

母の生家は今の鹿児島県の中心部から国分市に向かって街を出はずれた、海沿いの国道に面して入口がありました。道路の右側は堤防で、すぐ海でした。左側に道路と直角に広い石段がありました。両側は高い石垣で、10メートルほど登って右に曲ると真四角な広場があり、さらに少し登ったところにドラマに出てくるようなお玄関がありました。母は一時期、祖父が貴族院議員をしていたため東京に住んでいたようですが、結婚するまでのほとんどをこの家で過ごしました。また、私も小学校1年生の3学期（終戦の年）をこの家で過ごしました。その頃、ここには母の妹一家が住んでおり、お玄関を挟んで右側の三間ほどを借りて、母と二人の姉、すぐ上の兄と5人で暮らしました。正面に桜島が見える、日当たりのよいお座敷でした。お玄関の左側に叔母一家が住んでおり、姉弟4人の従姉弟がおりました。末の従兄弟とは同い年でしたので、お玄関下の広場でよく遊んだものでした。お隣なりは重富島津家の別邸でした。（今は重富荘という高級旅館になっております。）お隣なりとの境は土手になっていましたが、従兄弟と一緒にこの土手を超えて、お隣なりのお庭へ遊びに行ったものでした。時々、長い縁側でおばあ様が日向ぼっこをなさりながら、池のある美しいお庭を眺めていらっしゃることもありました。けれども、突然侵入してきた私たちを叱りもなさらず、お相手をしてくださいました。帰って母に話したら、「ちゃんとお挨拶したのですね」と厳しく確かめられたのを覚えております。同じ島津でも、上位の家の御隠後室様に遠慮があるのだと、幼いながら感じたものでした。わずか3カ月でしたし、第2次世界大戦末期の大変な時期でしたけれど、母にとっては結婚後初めての帰郷ではあり、昔馴染みの人たちに囲まれて、とても心のなごんだ時期であったのだと思います。あの三カ月は私にとっても思い出深い時でした。

母は水泳が上手で、私たちにも教えてくれました。のし（横泳ぎ）という日本の古式泳法でした。ある時「どこで習ったの？」と聞きましたら、「うちの前の海よ。」という返事が返ってきました。国道沿いの砂浜もない海で、夕闇にまぎれて、祖父母には内緒で、うちで働いていた男衆に教えてもらったということでした。いっさい自己主張をしたことのない母にも、そんな面があったのだと思いました。篤姫はご実家で大変おおらかに、伸び伸びとお育ちになったようですが、祖母といい、お隣なりのおばあ様といい、おおらかなのは島津一族に共通した生き方だったのかも知れません。

母は和裁も上手で、晩年まで和服を着ておりましたが、普段の着物はすべて自分で洗い張りをして、仕立てておりました。娘時代には女衆と一緒に機織りもしていたようで、これも花嫁修業の一つだったのでしょう。

武家ではいつ起こるかわからない戦にいつも備えをしていたようで、母もそうしたことを厳しくしつけられていたようでした。常に物を大切にいたしましたし、戦争末期の物のない時には、父が好きでした葉巻たばこやお砂糖をたくさん買い込んでいました。これには終戦後の貧しかった時に、父ばかりでなく私たちも大いに感謝したものでした。戦後といえば、母は姉と二人で広い裏庭を耕し、サツマイモ、ジャガイモをはじめあらゆる野菜を作り、鶏

を飼って、自給自足していた時期もありました。一角にいちご畑があって、春には食べきれないほどのイチゴが取れるのがとても楽しみでした。けれども、母にとってはずいぶんつらい時期だったことと思います。大変健康だったうえ、武家の娘として受けたしつけが、あのような生活に耐えさせたのでしょうか。

母は学校というものに一度も行ったことはないのですが、何でも知っており、何でもこなしてしまうことにはただ驚くばかりでした。新聞や本はよく読んでおりましたが、どんな教育を受けていたのか、もっとよく聞いておけばよかったと今にして思います。それとも商家に嫁いだ武家の娘の意地がそうさせたのでしょうか。

母はまた、新しい物、便利なものに興味を持ちました。戦争中から電動ミシンを使っておりましたし（何を縫っていたのかはわかりませんが）、戦後少し落ち着いてからは、本を片手に見よう見まねで私たちの洋服を作ってくれました。母独特の工夫もあって、どうしてあんなに手際よくできるのか不思議でした。兄がアメリカで結婚いたしました時にアメリカに行き、どの家庭にも食洗機があるのを見て、「あれはいい。主婦にとってあんなに便利なものはない。」といたく感心していたのも懐かしい思い出です。

島津家は、一族のつながりを大切にしていたようで、親睦会なども開かれていたようです。香淳皇后様（昭和天皇の皇后）もお母上は島津の出でいらっしゃいましたし、母とは年がお近かったこともあり、また、親戚の者が女官に上がっていたこともあって、母のことをお気に掛けて下さっていらしたようでした。昭和37年、父が亡くなりました時、お供物をいただきましたことは、ほんとうに思い掛けないことでした。

ずいぶん長くなってしまいました。この辺で失礼いたします。

守るべきもの、ドリーミングという思想を考える



松岡恒太郎（社）海外と文化を交流する会常務理事

アボリジニの世界感にドリーミングというものがある。

その解釈の1つは、アボリジニは“一人ひとりに守るべき植物、動物が決められている”というものである。

大阪の国立国際美術館で2月26日から開催されるアボリジニの画家であるエミリー・ウングワレー展の内覧会に参加する機会が与えられ、音声ガイドから絵の解説を聞いているときに上記のドリーミングの解釈を聞いてハッとしました。

現代社会に生きる私は、家族や身近な人を守るべきものとしてまず思い浮かべた。
もう少し広義で考えると、それは属している社会、まわりの環境などと言えるかも知れない。

一方、アボリジニのそれは、植物であり、動物であり、大地ということになる。
このドリーミングという思想がその後1つ1つの絵を見る際のキーワードとなった。

絵を見終わった感想、それはただただその存在がかけがいのないすばらしいものに思えた。私は絵画を鑑賞するとき、その絵が訴えかけるものは何であるかをすぐ考えてしまう癖がある。見る前から、情報という渦にまかれ、素直な気持ちで絵を鑑賞することがなかなかできないのだ。

彼女の120点余りの作品は、私に、「そんなに肩肘をはらなくてもいいよ、まあ、ゆっくり私の表現するドリーミングを見てゆきなさい」とささやきかけてくれたように感じた。別の言い方をすれば、作品1つ1つが包んでくれる温かさ、大きな力を肌で感じる事ができたとも言えよう。エミリーの絵はどこにも彼女のサインがない。物を占有しないドリーミングの世界観に由来するものではないかと想像したりもした。

今回の展覧会は、エミリー作品の海外での初の大回顧展であり、彼女の作品を通してアボリジニの世界観を十二分に感じ取れるまたとない機会となるだろう。

その中でも最も驚くべきことは、彼女は70歳近くからろうけつ染めでドリーミングを描くようになり、80歳近くからカンヴァス画を手掛けたそうである。亡くなるまでのわずか8年間に3-4千点ともいわれる作品を世に残すことになった。回顧展で目にした絵は80歳からの作品であったわけである。我々が持っている”もう歳なんだから”という既成概念を見事に壊す力がエミリーの作品には存在する。

是非、皆さんには5月28日-7月28日の間、国立新美術館（東京）に足を運んでいただければと思う。

ここで、アボリジニに関するニュースを1つお知らせしたい。オーストラリア連邦政府は、大阪で展覧会が開催される直前の2月13日に連邦議会でケビン・ラッド首相による先住民（アボリジニやトレス海峡諸島民）の子供達をその家族やコミュニティー、そして故郷から引き離れた点を公式に謝罪、30分にも渡る素晴らしい宣言をおこなった。議会は満場一致でこれを支持した。その中で、なぜ謝罪が必要かということに対する答えとして彼が述べた「自分の身に起こったらどうだったかと考えてください。そうすれば、どんなに赦すことがむずかしいか想像できるでしょう」というメッセージに感銘を受けた。

私は今日、この内覧会を通してエミリー・ウングワレーのその大きな心に触れ、気持ちに少しゆとりを感じる事ができた。一人ひとりがアボリジニのように私はXXを守る（=次の世代に残す）というように常に心掛けて考えて行動すれば世の中はよい方向に変わってゆく。それくらい大きな力がドリーミングという言葉には込められているということを感じながら、夕焼けに光る会場を後にした。

参考 URL

エミリー・ウングワレー展の公式ホームページ <http://www.emily2008.jp/>

公式謝罪文を含む先住民関連の背景情報

http://www.dfat.gov.au/indigenous_background/

ケビン・ラッド首相スピーチ <http://media.theage.com.au/?rid=35435>

会からのご報告とお知らせ

5月23日 青盛のぼるチャリティコンサートのお知らせ

恒例の(社)海外と文化を交流する会チャリティコンサートは、2008年の活動として「青盛のぼるチャリティコンサート」を開催します。

出演: 青盛のぼる(ソプラノ)

西山昌子(バイオリン)

飯 靖子(ピアノ/オルガン)

日時: 2008年5月23日(金) 開場 = 午後5時45分(バザーのため)

開演 = 午後6時30分

会場: 霊南坂教会(港区赤坂1丁目、アメリカ大使館裏)

全席自由

プログラム: カッチーニ「Ave Maria」

フランク「天使のパン」

ノルマ「清らかな女神よ」

渡辺玲子作曲/松岡裕子訳詞「千の風になって」 ほか

料金: おとな 4,000円(当日 4,500円) 大学生以下 2,000円

チケット申し込み: 郵便振替「(社)海外と文化を交流する会 00130-2-366249」にお名前・ご住所を明記くだされば、チケットをお届けいたします。

評判: 青盛のぼるさんのコンサートは大好評につき、海外と文化を交流する会のコンサートとして4回目になります。青盛さんはイタリアに在住、さまざまなオペラで活躍しているほかに、彼女が帰朝すると彼女から本場イタリアのボイストレーニングを受けたいという日本のオペラ歌手たちがいるとのこと。そんな青盛さんに期待する声も多数届いています。以下、ご披露いたしましょう。

「本物だけが与える感動なので、とても楽しみにしています」

「本場イタリアに行かなくて聴ける素晴らしい声に酔いしれました」

「4,000円では聴けないお値打ちのコンサートで、感激しました」

「世界に通用する歌姫を心から応援したい」などなど。

会費納入のお願い

2008年度の年会費納入さらに2007年度2006年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそその会なの

です。

一昨年は「メルボルン日本画展」およびシンポジウム実行という大きな事業を大成功させました。さらに将来、日豪両国の芸術専攻生の教育交流にも発展させたいと考えています。ぜひご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会

銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行渋谷支店（普）2266599 海外と文化を交流する会

会費 10,000 円（正会員） 5,000 円（特別賛助会員） 3,000 円（学生会員）

海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 11°イビル内

TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org

<http://www.kaigai-bunka.org>

——ニュージーランド国民への贈り物——

今から 27 年前のことです。友邦国がアメリカだけという日本の将来を案じた松岡朝（当時の専務理事）は「日本と同じ大きさの国、ニュージーランドへ友情の架け橋として、日本が誇りとするものを国民からの贈り物としたい」と理事会に提案しました。「たとえ国や言語に隔たりがあっても一点の絵画を前に話し合えばお互いの気持ちがなごむ。文化交流とはそういうもの」という彼女に理事方が賛同して日本画の秀作をお贈りすることに決まったのでした。

その後の 2 年間は、各画伯への制作依頼と資金作りで母は東奔西走の日々を過ごしました。先にオーストラリアへ日本画 25 点を寄贈した際、準備に 5 年の歳月を要し、特に各企業へ日参しての寄付金集めでの苦労はもうコリゴリと言って今度は自力の資金づくりを始めました。

完成までにあと一年という時、日本をこよなく愛した 87 年の生涯は燃え尽きようとしていました。病床で意識が薄れる直前、母からこの事業に残されている道のりを初めて聞き出した私は、5 ヶ月という短期間で超えなければならない山々の険しさにたじろぐ思いでした。しかし、それが本人の最後の夢なら、なんとしても叶えねばと思いました。

各画伯への作品の進行状態の問い合わせから始まり、万博記念協会と国際交流基金への補助金申請資料の作成、額装店との打合せ、図録作成、両国大使との話し合いと全てが手探りの初体験ばかりです。当時の白石英司会長、大谷敏治、首藤信成理事によるガイダンス、諸先輩、友人達、家族という人々の素敵な応援がありました。

16 点の作品が遂に揃った 2 月、当時のミラー駐日ニュージーランド大使は公邸を開放して作品披露レセプションをしてくださいました。大使は公邸内の大きな絵のほとんどを降ろし代わりに日本画を飾ってくれたのです。

3 月、幼い子供を友人に託して、私は独り贈呈式のためクライストチャーチ市へ飛びました。その日を夢みて果たせなかった朝の思いを胸に抱いて。

贈呈式の 2 日前のこと、ホテルの電話がけたたましく鳴りました。到着している筈の日本画はホノルルに行ってしまうというのです。空港ストなどを恐れて領事官達が、二ヶ所の空港で見守ってくれていましたが、「異国にあつては何がおきても不思議ではないのです」と田中領事官の言葉でした。

カンタベリー博物館に永久保管される日本画の頑丈な木箱 16 個が到着したのは、贈呈式当日の昼近くでした。夕方の式までに時間が足りません。ハラハラしながら陳列の指示をして、合い間に新聞社のインタビューを 2 つこなし、和服にも着替えました。ホテルに私を迎えにこられた市長夫妻に「式でスピーチをするのでドキドキしていませんか？」と問われましたが「いいえ、嬉しくて仕方がないのです。なぜなら今夕、私は晴れて自由の身になれるからです」が正に実感でした。

吉岡堅二、片岡珠子画伯といった 16 点の美しい日本画と並んで朝の写真も飾られていま

した。贈呈式では、その写真がひととき微笑んでいるように見えたのです。

(松岡裕子)